

上義務がなかったといえればそれまでだが、ヒトラーに反対して世界世論あるいはユダヤ人を動員するよう
 なことは何もしなかった。

ドイツ国内でもシオニスト連合は街頭にユダヤ人を繰り出させるようなことはしなかった。ドイツのシ
 オニスト機関誌『ユダヤ評論』は、ニューヨークではユダヤ人がデモを敢行するだろうと勝手に書いたが、
 ヒトラーが政権を掌握する前の段階ではアメリカでも反ヒトラー・デモはなかったというのが実情であつ
 た。ラビでアメリカ・ユダヤ人会議の指導者だったワイズは、アメリカの同化主義路線を推進していたア
 メリカ・ユダヤ人委員会とも（敢えて）協働してドイツ・ユダヤ人のリーダーたちにどんな援助が可能か
 照会したものの、ドイツ・ユダヤ人ブルジョワジーのほうは、この意思表示に感謝するのみで、事態がよ
 り悪化するようなことがあればその時は必ず連絡させてもらいますと確約するにとどまった。ワイズとし
 てはフーヴァー大統領に声明を出してもらおうという気持であつたが、それもアメリカ・ユダヤ人委員会
 にとつてはラディカルすぎる方策で、ワイズはこれを断念した。ワイズとナホム・ゴルトマンは一九三二
 年夏ジュネーブで世界ユダヤ人会議開催を組織したが、シオニズムに傾倒していたゴルトマンは、
 同化主義者との協働を望まなかつた。シオニズム運動は当時ユダヤ人の間では少数派であつた。会議は、
 改宗した者を説得しえたにすぎなかつた。しかも説得しえたのは改宗者のごく一部であつた。ヴァイツマ
 ンも、彼のあとを継いで世界シオニスト機構総裁に就任したナホム・ソコロフも会議には出ていなかった。
 会合からは何も出てこなかつたし、ワイズもゴルトマンも状況が重大であることを全く理解していなかつ
 た。列強の影響力をつねに信じていたゴルトマンは、一九三二年のドイツ・シオニスト連合総会で、英仏
 ソ連はヒトラーを権力につかせるようなことはしない、と語つた。ステイーヴン・ワイズは、おそらく問
 題が「自分たちのおそれているほどにはひどくならないだろう」とするような次元にさらに退避してしま

つた。ヒトラーの政権掌握のニュースを聞いた瞬間、ワイズが感じた唯一のリアルな危険はヒトラーがま
 た別の公約を守れなくなるのではないかという点にあつた。「反セム主義事項について、自らがナチの同
 志たちに従わなければならないという決断を結局下すおそれがある」というものであつた。⁽¹⁶⁾

「自由主義は敵である。またそれはナチスの敵でもある」

ドイツ・シオニストがナチ・イデオロギーの中の二つの基本的要素と一致していた点があつた。すなわ
 ちユダヤ人はドイツ国民の構成要素にはけつしてなりえないこと、したがつてドイツの地には場違いな人
 種であること、の二点がナチスのイデオロギーと符合していたとすれば、シオニストの中にナチとの間に
 妥協は可能だと考える者が出てくることも避け難かつた。ワイズが、ナチの陣営の中でヒトラーが穏健派
 だと勘違いするようなこともおこりえたのだから、ナチ党内にヒトラーをおさえられる分子が存在すると
 信ずる者が他のシオニストの中に出てきても不思議ではなかつた。ステイーヴン・ポツペルはシオニスト
 連合内部のこうした議論に触れている。

シオニストの中には、ナチズム運動内部にも内側から運動（の反ユダヤ主義）を抑制するのに役立つ
 うるようなきちんとした穏健な分子が存在すると考える者もいた……。これらの分子はある種のドイ
 ツ・ユダヤ融和を達成するための適切な交渉相手として役に立ちうる、というのである。この可能性
 をめぐつては、たとえば、それに激しく反対していたブルーメンフェルトとそれを支持していた『ル
 ントシャウ』の編集人ローベルト・ヴェルチュとの間に重大な意見の相違があつた。⁽¹⁷⁾

こうした考え方はヴェルチュひとりのもではなく、ヨーロッパのシオニスト系では最も古い「ユード
イシャー・フェアラク（ユダヤ出版社）」の編集人グスタフ・クローヤンカー二六も民族主義的非合理主義をシ
オニズムとナチズムの両運動の共通の根とみなし、シオニストはナチズムの民族主義的側面を積極的に認
めるべきであるという結論を引き出した。彼は、民族主義的同類のナチスに対して好意的に接すれば、ナ
チスの側からもシオニズムに対してそれに相応した好意的反応を生み出すだろうとナイーヴな推論をおこ
なっていた。このクローヤンカーにしても他の多くのシオニストにしても、デモクラシーの時代はもはや
終わったものとみなしていた。英国人で、当時の世界シオニスト機構の指導者のひとりだったハリー・サ
ツカーは、クローヤンカーの著書『新ドイツ・ナショナリズム問題に寄せて』に対する書評の中でクロー
ヤンカーの理論を次のように説明している。

シオニストにとって、自由主義は敵である。またナチスにとっても、自由主義は敵である。それゆえ
にシオニズムはナチズムに対してもつと共感と理解をもつべきであろう。反セム主義はおそらくナチ
ズムの中でもつかの間の付随的現象であらう。

たしかにシオニストの誰もヒトラーが権力を握るのを望んでいなかったし、ヒトラーに投票したわけで
もない。ヴェルチュにしてもクローヤンカーにしても、ヒトラーの政権掌握以前にはナチスに協力してい
なかつた。協力が始まるのはヒトラー政権成立後のことである。しかし、こうした考え方はシオニストが
数十年にわたって反セム主義を正当化し、それに抵抗しえなくなったことの論理必然的帰結であつた。ヒ
トラーが政権を掌握したら何が起ることになるか、シオニストのリーダーたちには分からなかつたとい
う弁解は通用しえないのである。どんなに楽観的に見積もつてみても、ユダヤ人が二級市民に格下げされ
ることはヒトラー自身の言動で十二分に確かなことであつた。さらにヒトラーがムツソリーニの賛美者で
あり、かつイタリア・ファシズムの一〇年間の支配がテロル・拷問・独裁を意味していたことはわかりき
つたことであつた。しかしナチスの、自由主義への敵対的態度、ユダヤ人同化問題へのかかわり方、議会
制の枠内でデモクラシーの権利をフルに行使しようとするユダヤ人に対する敵対という点からすれば、こ
うしたナチズムのファシスト的諸側面は、ドイツ・シオニスト連合指導者をあまり懸念させるものではな
かつた。このセクト的シオニストたちは、デモクラシーを防衛するために動員をおこなう義務が自らにあ
るとは考えなかつた。もうひとつのファシズム（＝ナチズム）がもっている重大なインプリケーション、
すなわちイタリア・ファシズムとは違い、ナチズムが公然たる反セム主義の立場を、しかもヨーロッパの
真ん中であつていることの重大な意味がシオニストたちには全く分かつていなかった。
ダンテの『神曲』には、後ろ向きに歩き、顔は首に反対向きにくつつき、目から涙をいつも流している
いんちぎ占い師が出てくるが、ヒトラーを誤解したシオニストはまさにそれであつた。